

自尊感情および社会志向性とステレオタイプの認知の関連

高橋 洋子

(宮城学院女子大学 人文科学研究科)

我々は、社会集団や社会的カテゴリ、性別・年齢・人種・職業などに対して、その成員がもつ属性について固定化されたイメージや先入観、つまりステレオタイプの認知を抱くことがある。どのようなパーソナリティをもつ人が、ステレオタイプの認知を抱きやすいのか。本研究では、ステレオタイプの認知の形成に影響を与えるパーソナリティ特性として、自尊感情および社会志向性に着目し、以下の仮説をたて検討した。

1. 自尊感情の高い人は、他者の意見や評価に左右されにくい側面があるため、物事をステレオタイプ化してとらえる傾向が低いのではないかと。
 2. 他者との関係や社会に適応している人、しようとしている人は、他者に合わせようとする志向が強く、ステレオタイプの度合いが高いのではないかと。
- 方法

被験者：宮城学院女子大学の学生 84 名を無作為に抽出し、質問紙調査を実施した。

質問紙の構成：

ステレオタイプ傾向：一般的に固定化されたイメージをもたれていると思われる事柄を「職業」「性別」「地域」「その他」に分け独自に質問項目を作成した。

自尊感情：自尊感情の高低をみるため、自尊感情尺度（ローゼンバーグ、1965；山本・松井・山成、1982）を用いた。

社会志向性：社会適応特性をみるため、個人志向性・社会志向性 PN 尺度（伊藤、1995）を用いた。

結果

ステレオタイプの認知の程度としては、50 点台から 60 点台の人が割合として多く、80 点満点であることを考えると、多くの人がステレオタイプ傾向にあることが示された。自尊感情とステレオタイプの関連では、ステレオタイプの程度を高低 2 群に分け、自尊感情について t 検定をおこなったが、自尊感情による効果はみられなかった。また、個人・社会志向性 PN 尺度とステレオタイプの関連については、ステレオタイプの高低 × 個人・社会志向性 PN の要因分散分析をおこなった。その結果、それぞれの主効果には有意差がみられたが、交互作用は有意でなかった。

ステレオタイプ尺度と他の尺度との相関をもと

めたところ、職業・地域・性別・その他からなるステレオタイプ尺度は強い内部相関がみられた。社会志向性尺度については、職業・性別・その他との間で正の相関が認められたが、地域との間には相関はなかった（表）。また、社会志向性 N 尺度については、性別との間に弱い相関がみられた。

	自尊感情	社会志向性
職業	0.16	0.33**
性別	-0.07	0.26
地域	-0.17	0.15**
その他	-0.12	0.22*

* $p < .05$ ** $p < .01$

考察

自尊感情とステレオタイプの認知には相関や有意な群間差がないことが分かった。つまり、仮説で述べた、「他者の意見や評価に左右されにくい」という自尊感情の高い人がもつ特性と、ステレオタイプの認知との間には関連がないことが明らかとなった。これについては、自尊感情という捉え方の難しい特性を把握し、尺度の選定もさらに吟味する必要があるように思う。

仮説 2. で述べたように社会志向性の高い人は、職業・性別・その他のステレオタイプの認知を抱きやすいことが明らかとなった。また、その中でもとくに職業に関するステレオタイプ社会志向性をもつ人は、他者との関係や社会にうまく適応し、また、そうあろうとする特性をもつ。したがって、自己の意見を調整しやすく、周囲の意見や情報に対して同調する傾向が強いことが予想される。このようなパーソナリティ特性が、固定化されたイメージをそのまま受け入れやすくし、ステレオタイプの認知を形成させているのではないかと。

また、ステレオタイプの下位カテゴリのうち、「地域」については社会志向性との有意な相関はみられなかった。これは、ステレオタイプ尺度の下位カテゴリにおける内部相関が低いことを考慮すると、本尺度で作成した地域に関するステレオタイプ項目が、ほかの 3 カテゴリと異なる性質を有している可能性が指摘できる。したがって、本ステレオタイプ尺度をさらに厳密に検討する余地があると思われる。